

翼(ばあー3)

希望を失うことなく、 未来へ



苦難の中に光を探して

2022年もあとわずかとなりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。昨年頃から今年にかけて、アフガニスタンと山の学校を取り巻く状況は変りました。昨年9月、タリバンがポータラント地区に侵入し、人々はカブールへの避難生活を余儀なくされたからです。しかし、首都では食費や住宅費の支出があり、人々は少しずつ故郷のポータラントに戻り始めています。

8月に学校は再開しましたが、2階図書館の入り口には土囊が積まれ、国民抵抗戦線との戦闘がいつ始まるかわからない状況です。タリバンが生徒たちを弾除けに使う可能性もあり、巻き込まれる危険があります。事務長のシャミルザには授業の停止をお願いしました。授業の遅れは取り戻せませんが命は取り戻せないからです。会としては地域からタリバンが撤退し、住民の安全が確保されたら、すぐにも教育支援と地域復興支援に取り組みます。それがいつになるかはわかりませんが辛抱強く、その日を待ちたいと思います。平和になって勉強が続けられる日、それを一番、待ち望んでいるのは地域の人々、そして子どもたちです。その気持ちに応え、この苦難を一緒に乗り越えていこうと思います。

ロシアのウクライナ侵攻、イランの反政府運動の高まりなど、世界情勢は混沌としています。私たちはこれからもブレることなく山の学校を見守り続けていきます。皆様の変わらぬ支援をお願いします。

アフガニスタン山の学校支援の会代表



長谷川洋海





暗雲を振り払うために

アフガニスタンの学校支援の代表表

長倉洋海

山の学校の現在

2022年12月現在、山の学校があるポランデ地区には今もタリバンの駐屯が続いているように。

昨年来、学校を宿舎としたタリバンは暖をとるため机やイスを燃やし、コンクリートを持ち去りました。図書館の本は動かれ用に捨てられまし



図書館の入口に積まれた土塵 2022年8月



壊された教室 2022年8月

た。今夏、地域住民の懇願で、タリバンは学校から退き、しかし、いまま周辺の民家に留まって、国民抵抗戦線の掃討作戦を続けています。タリバンから結婚を無理強いされることを恐れて、若い女性は戻っていません。卒業生で学校の教師となっていたシヤエスタやサマルグルもカブールに留まっています。

家の羊が心配でカブールから家に戻ったホラム先生は殴られ、ヤシン校長は暴行を受けて命からがら首都へ逃れた。彼の家は荒らされ、身の危険を感じて彼も学校には戻っていません。小さな時から撮影してきたナイマ（卒業生）は、父親と長兄が抵抗戦線への支援をわけてカブールの拘留所に入れられ、一家の収入は途絶え、母親が峡谷から羊を連れ戻って売却し、生活費を工面してきましたがこれ以上は続かないと聞きました。会社としては首都に避難した教師の給与支給と併せて、こうした人々に見舞金を出し、大学が中断し卒業者が迷ったパーゼット

（故テラタル校長の息子）に奨学金給付の延長をしてみました。ほかにも父親に職がないため路上で物売りをして家計を支えるカブールの子どもたちをサポートする現地NGOへの協力支援、白血病の治療費が工面できない少年（エムハム、13歳）の支援金も渡しました。ささやかであつても、そうした支援が世界の関心が薄くなったアフガニスタンの人々の気持ちを支えになると思うからです。



下校する女の子たち 2021年



元気だったアクバルくん 2022年8月



タリバンの暴挙、止まず

繰り返されてきたタリバンの暴挙はいまも止まりません。女子の中学・高校を閉鎖し、それに抗議する女性のデモ隊を銃で威嚇。女性活動家逮捕し、時には性的暴力も加えています。女性か性善活動家を取り上げ、戸外に1人でも出ることを禁じ、最近では公園やハمام（公衆浴場）への立ち入りも禁止しました。20年前に行われていた公開処刑や石投げの刑、窃盗犯の手足の切断なども復活させました。

中でも深刻なのは民族ジェノサイドです。中央アフガニスタンや北部バハラ（人口の15%、20%）やヤシク人（同25%）の家屋の破壊や接収が行われ、先祖伝来の土地から切り離すことで民族アイデンティティを喪失せよとされているように。タリバンはこの国を自らの出身母体「パシュトゥーン人（人口の40%）の国」にしようとしていると考えられます。そのためテロを肯定しています。そうした姿勢が学校やシニア派モスクでの自爆テロにも繋がっていると思われています。

マスードの故郷パシールでは在任の連捕と拷問、戦争捕虜や民間人への違法殺害が頻繁に行われていて、現地テレビ局のAmuTVは「少年や少女を含む172名の民間人が殺害された」と犠牲者の写真とともに伝えています。イスラム教徒とともなえまじき行為も行われています。マスードの墓は三度にわたって墓石が倒され、墓の上を子どもに土足で走らせられています。これは本来のイスラムではあり得ないことで、タリバンはマドラサ（イスラム寺小屋）で過激なイスラム解釈を教えられてきたため、女性を尊重することも、同じイスラム教徒を尊重することもできないのかもしれない。また、歌や茶室の演奏などを禁じ、文化や伝統との切り離しも進めています。ベルシャ式の新年の祝いも廃止され、人々の嘆きが聞こえてくるようです。教育は西側思想を広めるものと考えているせいか、パンシール大学も火をかけた燃やされました。大学制度をやめ、イスラム教育のためのマドラサに切り替える政策も始まっているようです。さらにタリバンは世界のイスラム過激派を受け入れ、中央アジア周辺国へのイスラム過激派思想の浸透を狙っています。アルカイダをはじめとする過激派組織

はアフガニスタン、ウイグル、パキスタンなどのものを加えると23グループ、1万人近い兵力となっていると言われています。



希望の在り処

国民に選挙で信を問うこともなく武力で国民の権利と生活を守りあげようとするタリバン。それに軍事も含まれた抵抗を続けている組織が国民抵抗戦線です。リーダーのアフマド・マズード(故マフドムの長男)は「タリバン打倒ではなく、様々な民族や勢力が加わる包括政府の形成」を求めて交渉を呼びかけています。また、タリバンは応じていません。そのタリバンを支え、操縦うとしてるのが隣国パキスタンの、国内内国家と呼ばれる軍の統合情報局です。それに加えて米軍がタリバンへの支援を強めています。ロシア側にも中国側にも立たせない戦略のもと、タリバンを唯一の交渉相手と考え、このところ合計で10億ドルもの現金を首都の銀行に運び込んできたと伝えられています。

こうした国々がタリバン支援をやめない限り、アフガニスタンの正政はいつまでも続き、人々は苦しむこととなります。国民生活を顧みることのないタリバン統治下で、経済状況は最悪で、多くの国民が食糧不足で苦しむ中、麻薬だけが増産されています。

そうした中でも、希望を捨てることなく変革を求めて行動する人々がいます。その姿を見守り、応援したいと思えます。その先に、アフガニスタンの暗黒が振り払われる日が必ず来ると思うからです。マズードは「希望を失わなければ未来は必ず、開ける」と話していました。私たち「山の学校支援の会」は、山の子供たちもたちが以前のように学べる時が来るのを信じ、そして、彼らの笑顔に再会できる日を思い描きながら活動を続けます。



食事を囲まれた「山の子どもたち」2022年 安井浩美 撮影



コンクール(大学受験)の様子 2020年 [ハンセル]



今

年も残すところあとわずか。昨年8月にイスラム主義組織タリバンが二十年ぶりに復讐しあつたという間に1年3か月が過ぎた。今でも当時のカブール空爆の惨状を思い出すと悲しくなる。時がたつにつれ街は、落ちついたように見えるが、過度に武装したタリバン兵士を街で見ると1年前の惨劇を思い出し、心穏やかではいられない。タリバン復讐後まもなくして、日本の中等教育にある7年生から12年生のおよそ3百万人の女子が通う女子校が閉鎖され400日以上が過ぎた。学校閉鎖の理由は、国民もよく分からないが、タリバン指導者のハイバトゥラ帥が許可を出さないのが一番の理由かもしれない。あるタリバン幹部によると、タリバン内の9割が学校再開を望んでいるが上層部に願くもはない、と話し、いまだに女子校再開の見通しは立っていない。長引く学校閉鎖に最初はタリバンに再断を依頼していたが今となっては、「もう疲れた」と希望を失ったか今に話す女生徒が多くみられる。女子校閉鎖にもかかわらず、大学受験は行われ、女性が受験できる学部には制限があり、ジャーナリズム、農業、経済、建築科などは、受験できない。女性の患者は、女医が診察する必要があるため医学部の受験は認められていない。

最近、勸善懲悪省は、女性の公共のハمام(大衆浴場)への出入りを禁止した。首都カブールでは、各家庭に水廻りが普及しておらず、自費で井戸を掘るか、それが無理な家庭は、生活用水を購入して生かしているのが現状だ。国民の半数以上が食糧支援の必要な状況の中、寒い冬に唯一温まることができるハمامの存在は健康維持のために大切なのに、その権利までも女性から奪うのは女性に対する嫌がらせにしか言いようがない。さらに、ジムや遊園



北西部フリアフ州のNGO支援の学校で学ぶ女子生徒 2022年

地へも女性の出入りが禁止され、女性は、子どもを産んで育てることが役目と考えタリバンは、国民の権利を奪うことより、女性の権利救済に忙しい。11月に入りアフガニスタン各地で初雪が観測され、山の学校のあるパンジシルでも積雪が、シャール・ミルザ先生が中心となり授業を再開しているが、生徒数は二十人に満たない。タリバン政権から「開校しない」との通告を受けたシャール・ミルザ先生とそれに関与した先生たちの措置だ。パンジシルからの報告によると、ポータンデ地区には、タリバンの基地が設けられ、百人以上の兵士が日々、ポータンデの谷に駐屯し、村々の空き家には、タリバンが住んでいる。いつもで戦えるように戦闘態勢を整えた軍事エリアに数人の学校。ポータンデ谷の入り口にある女子校に山の学校は、タリバンにより破壊され、一時的に閉鎖されました。バザラックにある男子校近くで爆発があり、学校の窓ガラスが破損した。学校内にもタリバンがやつてきて図書館の家具や教材を破壊した。本日は悲しい話ですが、この状況が変わるにはタリバンがいなくなるか、タリバンが変わるかのどちらかしかありません。



マルサルさんのカブール通信

2022年11月16日 カブールより 安井浩美

これら厳しい冬を迎え、人々が小躍りかき喜ぶ状況ではないアフガニスタン。寒さで人命が奪われないことを祈るしか私にはできないのが辛く悲しい思いです。来年こそは良い知らせとともに人々の暮らしが少しでも良い方向に向かうことを願ってやみません。

地へも女性の出入りが禁止され、女性は、子どもを産んで育てることが役目と考えタリバンは、国民の権利を奪うことより、女性の権利救済に忙しい。11月に入りアフガニスタン各地で初雪が観測され、山の学校のあるパンジシルでも積雪が、シャール・ミルザ先生が中心となり授業を再開しているが、生徒数は二十人に満たない。タリバン政権から「開校しない」との通告を受けたシャール・ミルザ先生とそれに関与した先生たちの措置だ。パンジシルからの報告によると、ポータンデ地区には、タリバンの基地が設けられ、百人以上の兵士が日々、ポータンデの谷に駐屯し、村々の空き家には、タリバンが住んでいる。いつもで戦えるように戦闘態勢を整えた軍事エリアに数人の学校。ポータンデ谷の入り口にある女子校に山の学校は、タリバンにより破壊され、一時的に閉鎖されました。バザラックにある男子校近くで爆発があり、学校の窓ガラスが破損した。学校内にもタリバンがやつてきて図書館の家具や教材を破壊した。本日は悲しい話ですが、この状況が変わるにはタリバンがいなくなるか、タリバンが変わるかのどちらかしかありません。



米軍撤退1周年を祝うタリバン 2022年

7月の講演会・11月の現地報告会

7月10日(日)吉祥寺の武蔵野商工会議所4階にて、カブールより一時帰国中の安井浩美さんをお迎えして講演会「山の学校とアフガニスタンの今」を開催しました。満員となった会場で、アフガニスタンの最新状況、山の学校の先生や子どもたちの現状を話していた



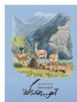
だきました。最後には学校の事務長シャーミルザ先生からのビデオメッセージが流され、「これまでの支援への感謝」の言葉と継続のお願いがありました。

また11月12日(土)には吉祥寺の武蔵野公会堂にて現地報告会を開催しました。第一部は長倉洋海代表による「この一年を振り返って」、第二部はカブールの安井浩美さんとネットをつないで「現地からの最新情報」をお話いただき、第三部では当会が制作した「マースド絵本」を朗読ご紹介しました。82名の方々にご参加いただき、アンケートにも「これからもできることを考えたい」など多くの声が寄せられました。ご参加くださった皆様、本当にありがとうございました。



マースドのことを知らないアフガニスタンの子どもたちにその姿を伝えたいと会が制作したベルシャ語の絵本。昨年、学校の子どもたちに配布した。

『鹿をたくさん獲って歓迎しようとした人に、『どうして無駄な殺生をするのか』と彼が怒って鹿を立つところから物語が始まる。



ソ連軍の爆撃で木々が焼かれてもすぐに植林を開始したマースド。彼は何を大切にすべきか知っていました。作者の父親はマースドと共に戦ったイスラム戦士で、これは実話に基づいた話です。



現地報告会、参加者の声

【第一部】長倉代表による「この一年を振り返って」

● 正気を持ち続けること、教育の大切さを改めて思いました。● 一見落ち着いているように見えるアフガニスタンのタリバンのそうじゃない姿を知り、とにかく問題意識を持ち続けなければならないこと痛感しました。● 久しぶりに長倉さんのお話をうかがいました。ストレートであたたく、胸に響きました。アフガニスタンを今後どう見つけていきたいと思いました。● 米

国の身勝手な御都合主義に、人権、国が振り回される現状にいきどおりを感じます。● 山の学校の会がカブールや他の地域に住む人々へも支援の手を広げていることに賛同します。

【第二部】安井浩美さんの「現地からの最新情報」

● 人々が精神を病むほどの状況、生々しかった。安井さんの寛悟に敬服する。生活の様子がよくわかった。● アメリカから資金援助を受けているタリバン、この構図はちょっとショックでした。● 生々しい現状を、リスクを構いつままお伝えいただきありがとうございました。安井さんのパワフルで真っすぐなハートにいつも感銘を受けています。● タリバンの後ろにアメリカやパキスタンがいることを知らない人も多いし、タリバンが柔軟になってアフガニスタンは落ち着いていると思っている人も多いので、現実を知らせ、声をあげていきたいと思いました。



【第三部】「マースド絵本」のご紹介

● 人間だけでなく、自然人も宇宙の中で平等、とてもすきな本です。● マースドのように、戦闘の中にも正気（道徳心）を失わずに生きている、周りに流れずしっかり実行動いている姿は、今の日本においても見習うべき姿だと思います。● この本が子どもたちに一冊でも多く届きますように。その日が早く来ますように。

【全般】● これからも支援を続けていけることを願っています。長倉さんから繰り返し言われた「正気」を保っていただきたいです。さまざまな大小の「狂気（おかしな事）」に飲み込まれないために。



事務局より

- 学校の全面再開の目標はたっていませんが、会費やご寄付は例年どおり受け付け、学校の再開時には地域の復興支援と併せて、使わせていただきますのでよろしくお願いいたします。
- 不要切手や書き損じはがきのご提供をありがとうございます。今後ともご協力を願っています。
- カレンダーは頒布していますが、まだ残部があるので欲しい方はご連絡ください。
- 住所変更場合は、お手数ですがメールやハガキなどで事務局までご連絡ください。



アフガニスタンの学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会ったパンシール渓谷ボランダー地区の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年4月に設立、以後2014年3月までの約10年間におわたって活動を続けてきました。その後2017年3月まで活動を延長、4月より第2期支援活動をスタートしました。

アフガニスタンの学校だより **ばあー3** 2022年号・通算38号

発行日: 2022年12月18日 発行: アフガニスタンの学校支援の会
〒187-0032 東京都小平市小川町1-1071-15 比留川発行

【申込先】ゆうちょ銀行 振替口座 加入者名: アフガニスタンの学校支援の会
口座番号: 00160-1-667404

電話: 070-3281-1180 E-mail: info_yamanogakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
編集・発行: 長倉洋海 編集・イラスト: 近藤理恵 デザイン: 鈴木慶彦
編集業務: 森 桂子 印刷: 藤田印刷株式会社

